様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５１６

研究課題名（和文）江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究

研究課題名（英文）Historical Sociolinguistic Study of Stylistic Competence: The case of the latter Edo Period authors

研究代表者
渋谷　勝己（Shibuya, Katsumi）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０２０６１５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：江戸後期に執筆活動を行った著作者が作品間、作品内で行ったスタイルシフト、及び、当該作者のもつスタイル能力の分析を、以下の３項によって行った。(1) バイリンガル、第二言語習得、歴史社会言語学の分野で過去30年に刊行された文献をレビューし、研究の動向や問題の所在を整理した。(2) 山東京伝と曲亭馬琴を中心に、洒落本、黄表紙、合巻、読本で使用したことばを、音便形、使役形、可能形等を事例にして整理し、スタイルシフトとして把握した。(3) そのスタイルシフトの実態にもとづいて、渋谷（2013）が構築した、当該著作者のもつ多変種能力を示す「多言語・多重変種のソーシャルマーカモデル」を改定、拡大した。

研究成果の概要（英文）：This project aims to elucidate the stylistic competence of the authors such as Kyoden Santo and Bakin Kyokutei who actively produced their literary works during the latter half of Edo Period through the scrutiny of their style-shifting behavior. The following are the research agendas and results: (1) For the purpose of posing research questions, previous studies on bilingualism, second language acquisition and historical sociolinguistics published during the past 30 years were reviewed. (2) Onbin forms of verbs, causative forms and potential expression forms employed by the authors in their literary works such as share-bon, kibyoushi, gokan and yomihon were collected and analyzed from the perspective of style-shifting. (3) Based on the above analyses, revised and enlarged version of the Social Marker Model of Multicompetence (Shibuya 2013) was constructed.

研究分野：日本語学

キーワード：江戸語　多変種能力　スタイル　スタイル切替　山東京伝　歴史社会言語学

１．研究開始当初の背景

言語の使用者は誰でも、複数の言語やひとつの言語の複数の変種（スタイル）を運用する、多言語・多変種使用者である。この複数の言語やスタイルについては、これまで、バイリンガル研究や第二言語習得研究、変異理論研究などの分野において、次のような観点から研究が行われてきた。すなわち、それぞれの使用者は、

(a) 転移や混淆などを含め、結果としてどのような言語システムを構築しているか（言語的側面）

(b) 場面や聞き手、話題などに応じて、その複数の言語をどのように切り換えて使用しているか（社会的側面）

(c) その複数の言語をどのようなプロセスを経て構築し、脳内にどのようにストックしているか、また、どのような心的プロセスを経て発話を行っているのか（心理的側面）

といった観点である（Romaine, S. 1995 *Bilingualism*. Blackwell、Li, W. 2000 *The Bilingualism Reader*. Routledge 所収論文など）。

実施者もこれまで、こういった背景のもと、KY コーパスなどを利用して第二言語の習得過程を明らかにし（上記（a）。渋谷他『日本語学習者の文法習得』大修館書店、2001）、また、自然談話を用いて、方言話者や日本語学習者が聞き手に応じてスタイルを切り換える実態を記述するプロジェクトを主導してきた（上記（b）。渋谷 2002「プロジェクトの概要」『阪大社会言語学研究ノート』4）。さらに、これらの分析結果を踏まえつつ、個々の言語使用者がもつスタイル（運用）能力のあり方をモデル化することを試みてきた（上記（c）。渋谷 2013「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡・池田編『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房）。

本研究課題は、さらに、それぞれの言語使用者のもつ書きことばの複数のスタイル変種やその使用実態を明らかにするとともに、書きことばのスタイル能力も含めた発展的なスタイル（運用）能力モデルを構築することを試みるものとして企画した。

２．研究の目的

本研究課題は、次の３点を主な目的とする。

（1）先行研究のレビューと問題のありかの確認。

（1-1）実施者のこれまでの研究、および、第二言語習得やバイリンガル研究を含む多言語・多変種能力をめぐって行われた先行研究を批判的に検討することによって、研究動向、および、本研究課題において取り組むべき問題点をあらためて確認する。

（1-2）同じく、1980年代から行われるようになった歴史社会言語学の発展過程を振り返りつつ、本研究課題を歴史社会言語学研究のなかに位置づけ、取り組むべき課題群を整理する。

（2）個々の著作者のもつ書きことばのスタイルの記述とその運用実態の解明。実施者はこれまで、山東京伝や曲亭馬琴、夏目漱石が、読本、黄表紙、洒落本、あるいは小説、随筆、日記、論文などのなかで使用した可能表現を対象として、それがどのような体系的特徴をもつのか、また、どのような形式をどのように使い分けたのかを明らかにしたことがある（渋谷1993「意味の縮小と文体差」『近代語研究第九集』、武蔵野書院；同1998「漱石のスタイルシフト」『待兼山論叢 日本学篇』32、大阪大学文学会）。本研究課題では、さらに、洒落本（会話部分も書きことばとする）、狂歌、随筆、古典研究など、多彩なジャンルで多彩なスタイルを用いて執筆活動を行った江戸後期の著作者（属性等が異なり、全集が整備されている本居宣長、大田南畝など）が使用したことばも視野に入れつつ、その習得した書きことばの複数のスタイルとその運用実態を明らかにする。研究の対象には、書きことばの変種間の距離が現代よりも大きく、十分な言語量が残されているこの時代の資料が適切である。

なお、この（2）の目的は、申請者が構想してきた歴史社会言語学の実践の試みの一環でもある。

（3）話しことばと書きことばを含めたスタイル（運用）能力のモデル化。上記（2）の目的について明らかになる結果と、実施者がこれまで現代日本語の話しことば変種について個別に行ってきた、第二言語習得のプロセス、スタイル切換え行動、多変種能力のあり方をめぐる研究の成果などを有機的に統合し、時代や場所に特定されない、言語使用者が普遍的にもつスタイル（運用）能力を包括的にモデル化することを試みる。

３．研究の方法

課題の実施にあたって、次の方法を採用した（番号は２項「目的」のそれに対応する）。

（1）多言語・多変種能力および歴史社会言語学関係のアンソロジーやハンドブックに収録された論文のほか、過去 30 年ほどのあいだに刊行された専門学術雑誌掲載の関係論文やモノグラフによって、この分野が示したこの間の研究動向を描き出すとともに、取り組むべき課題を整理する。この作業は、下記（2）（3）と並行して、実施期間中を通して行う。

（2）実施者がこれまで実施した可能表現等のスタイル研究において採用してきた Labov の変異理論の記述方法を本研究課題でも採用し、可能表現のほか、江戸後期の著作者のスタイル切り換え行動が顕著に観察される言語事象（音便形や否定形などの形態的側

面)、ヴォイス形式（とくに使役形)、アスペクト形式（リ・タリ・ツ・ヌ；テイル)、テンス（キ・ケリ；タ)、モダリティ形式などにも対象を広げ、作品間、作品内のスタイル切り換えの実態をできるだけ広範に記述することを試みる。具体的な方法は次のとおりである。

① 各作品から分析の対象となる用例を抜き出し、データベースを作成する。

② このようにして蓄積したデータから、各著作者がそれぞれの作品で使用した形式の運用実態を明らかにする。

③ それぞれの著作者がもつ複数の書きことば形式・変種の、作品間および作品内でのスタイル切り換えのあり方を明らかにする。

（3）（2）で明らかになった実態について、Labov の、注意度によるスタイル切り換えメカニズムのほか、Bell のオーディエンスデザイン、Rumpton や Eckert の構築主義、Schilling-Estes の話者デザイン等のアイディアの妥当性を検証しつつ、話しことばと書きことばを含めた、実施者独自のスタイル能力のモデル化を試みる。具体的には、実施者が、渋谷 2013「多言語・多変種能力のモデル化試論」（片岡・池田編『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房）で、話しことばを材料にして構築した多言語・多変種のソーシャルマーカモデルを、書きことばにおける多変種使用状況をも説明できるようなモデルに改定、拡張し、話しことばと書きことばを含めた、ひとりの言語使用者のもつスタイル（運用）能力の包括的なモデルを構築する。

なお、以上の作業で得られる研究成果は、随時、研究会や学術誌等で発表する。

４．研究成果

実施期間中に得られた研究成果は、以下の通りである（（1）～（3）は２項「目的」のそれに対応する）。

（1）先行研究のレビュー

（1-1）これまで行われてきた第二言語習得研究のうち、とくに習得者の心理面にスポットライトを当てて提唱された理論を重点的にレビューし、「第二言語習得理論」（『日本語学』34-14、2015）にまとめた。また、実施期間後の刊行であるが、同じ視点から「第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、2016）をまとめ、スタイル習得および運用を分析するための基盤を整備した。

（1-2）主に 1980 年代以降、国内外で公刊された歴史社会言語学関係の論文をレビューし、報告書としてまとめた。報告書の構成は以下の通り。

・第１章　歴史社会言語学の成立
・第２章　歴史社会言語学のキーテーマ：英文文献
・第３章　歴史社会言語学のキーテーマ：邦文文献

第１章では、社会言語学および歴史言語学との関係における歴史社会言語学の位置づけを確認するとともに、歴史社会言語学成立の契機となった事象を整理した。また、第２章では、欧米でこれまで行われてきた歴史社会言語学が取り上げたトピックと、社会言語学や歴史言語学が取り上げてきたトピックをつきあわせ、今後の歴史社会言語学的研究が取り組むべき課題を整理した。第３章では同じ視点と方法によって日本で行われてきた研究を整理した。第２章、第３章とも、付録として関係文献目録と目次を掲載している。本報告書にはその他、付章として、実施者が構想する歴史社会言語学を簡略にまとめた

・「歴史社会言語学の（再）構想」（『明海日本語』18、2013）

を再録した。なお、この作業をもとにして、当該分野の教科書に、入門者向けの導入である、

・「歴史社会言語学の基礎知識」（1、2 項）『歴史社会言語学入門―社会から読み解くことばの移り変わり―』（高田博行・家入葉子と共編著、大修館書店、2015）.

を執筆した。

（2）（3）個々の著作者のスタイルの記述およびモデル化

本研究課題の中心的な作業である本項については、以下の論文を執筆した。本研究課題で重点的に分析を行った山東京伝と曲亭馬琴の作品のうち、洒落本・黄表紙・合巻・読本で使用した動詞音便形、使役形、可能形の３項目を材料にして、二人の著者のスタイル運用実態とスタイル能力を考察したものである。

・「山東京伝の作品に見るスタイル切り替え―音便形・非音便形を事例に―」高田博行・渋谷勝己・家入葉子編著『歴史社会言語学入門―社会から読み解くことばの移り変わり―』大修館書店、2015）
・「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム―山東京伝を例として―」『社会言語科学』18-1、2015）

これらの論考では、以下のようなことを明らかにした。

① 江戸後期に執筆活動を行った著作者は、大きくまとめれば、文語スタイルと口語スタイルといった言語資源をもっている。それぞれの著作者の口語スタイルを構成するのは当時使用されていた口頭語（vernacular）であるが、文語スタイルは、それぞれの著作者が、それまで接してきた古典や同時代人が執筆した文章をインプットとして、それぞれの時代や作品に顕著に観察される複数の形式のなかから独自の基準で自身が使用する形式

を選択し、独自の様式で作り上げたスタイルであり、著作者間で相違が見られるものである。

③ スタイルの運用面では、それぞれの著作者は、それぞれの作品を執筆する場合、その作品のジャンルに応じて使用する基本的なスタイルを決定するが（グローバルデザイン）、個々の作品の内部では、登場人物の特徴や行動、コンテクストなどに応じて文語スタイルと口語スタイルを自在にミックスして文章を構成する（ローカルデザイン）。

④ その際、文語スタイルや口語スタイルを構成する個々の言語要素には、そのスタイルをきわめて強力に表示する強いスタイルマーカーと（使役のシム、可能のアタフ、可能動詞、デキルなど）、それほど強力ではないが一定程度の力でスタイルをマークするマーカー（音便形、可能のカナフなど）、さらにはスタイルマーカーとしては機能しない形式（可能の助動詞レルなど）があり、個々の作品の内部で活用されている。

以上のような知見をもとに、実施者が話しことばを材料にして構築した「多変種・多言語能力のソーシャルマーカモデル」（「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房、2013）を見直し、書きことばにおける多変種使用状況をも説明できるような変容を加え、話しことばと書きことばを含めた、ひとりの言語使用者のもつスタイル（運用）能力の包括的なモデルを構築した。

以上の分析およびモデル化の意義は、次のような点にある。

⑤ 従来の多くの江戸語の研究に見られるように、作品の会話部分のみを取り出して、当時の話しことばの実態を記述するだけでなく、地の文等も分析の対象として、「江戸後期に使用されたことばをまるごと捉えようとしたこと。

⑥ 従来の研究のように、江戸語資料の会話部分で使用されていることばを、その「話者」が使用することばとして捉えるのではなく、作者が登場人物に使用させたことばとして捉える視点を導入したこと（cf. 金水敏の「役割語」）。

⑦ このような視点のもと、さまざまな著作者によって執筆された作品のことばを横断的に調査するのではなく、一人の著作者に焦点をあてて、その著作者を、複数の日本語書きことば変種を自在に運用する行為者として捉えたこと。

⑧あわせて、それぞれの著作者が、どのようなスタイル能力をもち、それをどのように運用しているのかを、（音便形や使役形、可能形等の運用実態から）明らかにしたこと。以上⑦と⑧は、バイリンガル研究・第二言語習得研究と古典語研究を融合する試みである。従来、主に話しことばを対象としてきたバイリンガル研究と、モノリンガルである著作者の書いた書きことばを対象とする古典語研究のあいだには大きな距離があり、古典語研究のなかにバイリンガル研究あるいは第二言語習得研究の視点を導入する試みはほとんどなかった。本研究課題ではとくに、従来の研究では注目されなかった著作者の書きことば面でのスタイル能力とその運用実態をハイライトすることによって、あらたな研究分野とその方法を開拓することを試みた。このことによって、本研究課題は、現在成長期にある歴史社会言語学の理論と方法を大幅に進展させるのに寄与したものと思われる。

（4）その他

本研究課題においては、その他、従来からの実施者の研究に接続するものとして、

・渋谷勝己（2014）「接触言語学から構想する方言形成論―ハワイの日系人日本語変種を例にして―」小林隆編『柳田方言学の現代的意義』ひつじ書房

も執筆した。この研究も含め、本研究課題を、これまで行ってきた実施者の研究にあらためて統合すれば、次のようになる。

⑨ 実施者の研究課題は、言語使用者の多言語・多変種能力とはいかなるものかを明らかにすることにある。ひとりの言語使用者のもつ多言語能力や多変種能力が頭のなかにどのようにストックされているかというrepresentationの問題は、現代語を含めても、日本の研究界ではあまり注目されることがなかった。本研究課題では、従来行ってきた現代語を対象とする分析に加えて、この問題意識を古典語研究のなかにも導入しつつ、あらたな素材を対象として問題にアプローチする可能性を提示した。なお、本研究課題の試みは、今後、さらに、渋谷勝己（2010）「移民言語研究の潮流―日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて―」『待兼山論叢 文化動態論篇』44が構想したような接触言語学のプログラムとも統合していく必要がある。今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 渋谷勝己、第二言語習得理論、日本語学、査読無、34-14、2015、pp．138-150

② 渋谷勝己、書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム―山東京伝を例として―、社会言語科学、査読有、18-1、2015、pp．23-39

③ 渋谷勝己、ひつじ書房、接触言語学から構想する方言形成論―ハワイの日系人日本語変種を例にして―、小林隆編　柳田方言学の現代的意義、査読無、2014、pp.317-340

④ 渋谷勝己、歴史社会言語学の（再）構想、明海日本語、査読無、18 増刊号、2013、

pp. 313-321
http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/18ex/default.htm

〔図書〕（計１件）

① 高田　博行、渋谷　勝己、家入　葉子編著、大修館書店、歴史社会言語学入門―社会から読み解くことばの移り変わり―、2013、5-22、70-91

６．研究組織

(1)研究代表者

渋谷　勝己（SHIBUYA, Katsumi）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：９０２０６１５２